
ルターの結婚

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルターの結婚

【Nコード】
N0274Z

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
実は世話焼きのマルチイン「ルターは修道女達の結婚まで世話をしていた。しかし一人だけ残ったシスターがいた。ルターがその彼女に対してしたことは。実はルターはかなり人間臭い一面もある人でした。

第一章

ルターの結婚

マルティン＝ルターという男がいた。

とにかく過激だ。教会を批判し神聖ローマ皇帝に言われても折れない。とにかく己を曲げずにただひたすら突き進む。そうした男だ。ところがだ。彼についてだ。修道院の尼僧達は笑いながらこう話すのだった。

「あの人はですね」

「物凄くお節介というか世話焼きなんですよ」

「私達にもよくしてくれますし」

「何かと声をかけてくれて」

そうしてくるというのである。

「いえ、私達もやがてここから出ないといけませんけれど」

「出たらすぐにあれですね」

「結婚しないといけないですよね」

「そうしないとやっぱり」

絶対にだというのだ。これは当時のまさに絶対の考えだ。

その彼女達に対してだ。彼は。

結婚相手をだ。見つけてきているというのだ。

「他にもですね」

「何かと世話を焼いてくれます」

「親切な人ですよ」

「とても」

そうした者だというのだ。ルターは。

だから尼僧達からの評判はいい。それもかなりだ。

だがルター自身はそれについては何も言わずだ。同士の若い僧侶にだ。

真面目な顔でだ。こう話すのだった。

「彼女達はどうかね」
「尼僧の方々ですか」
「うん。いい相手が見つかるといいけれど」
「あの、それは」
「だ。若い僧侶はだ。」
「怪訝な顔になりだ。こう彼に言うのだった。」
「全てルターさんがお世話しているのでは」
「そうなるのか」
「なりません。実際に今もですね」
「見ればだ。今ルターはだ。」
「若い男、貴族や富裕な家の者の肖像画をしきりに見ていた。」
「そうしてだ。その尼僧達の経歴が書かれた文も読みながらだ。」
「あれこれと調べ考えている。その彼を見てだ。」
「若い僧侶はだ。彼に言うのだった。」
「お見合いの用意をされているではありませんか」
「いや、女性は幸せにならないといけないんだ」
「ルターは何故か言い繕う様にして話す。」
「だからね」
「それ故にですか」
「そう。相手はよく選ばないと」
「言いながらだ。今もだった。」
「男の方の肖像画を見る。しかもだ。」
「彼等についても書かれた文を見てだ。若い僧侶に話す。」
「駄目だからね」
「それはわかりますが」
「いいかい？ローマカトリック教会は」
「ここでバチカン批判をするのがルターだった。」
「女性をどう思っているか」
「奴隷ですね」
「確かに女性はイブの子孫だ」

アダムを誘惑した。知恵の実を食べさせたそれだというのだ。こ
うした意味でルターもこの時代の聖職者でありだ。そこには限界が
あった。

だがそれでもだった。彼は。

こう言っただ。バチカン批判と共に女性について言うのだった。

「しかし。結婚は」

「それはするべきですね」

「よい相手と結婚するべきなんだ」

これはだ。絶対だというのだ。

「ローマ教会は女性を一生教会に閉じ込めることも厭わないが」

「それは間違いですね」

「間違いだ」

断言だった。

「そんなことをしてはならないんだ」

「だからですか」

「そう、こうして誰にも相手を探してるんだ」

そうしているというのだ。

「誰にもね」

「ううん、それはわかりました」

若い僧侶はそのことについては納得した。

第二章

だが、だ。それでもだった。

彼はいぶかしむ顔でだ。ルターに話した。

「けれどですよ」

「けれど。何だい？」

「大抵の人が相手が決まりそうですけれど」

「それでもかい」

「はい、お一人だけ」

決まりそうにないというのだ。

「どうしましょうか」

「ああ、彼女だね」

「はい、あの人です」

また言う若い僧侶だった。

「どうしましょうか」

「ううん、誰もが幸福になるべきなんだ」

ルターは腕を組んで難しい顔になって述べた。

「そうあるべきだから」

「あの人にもですな」

「そう、相手を見つけないと」

そうしなくてはならないというのだ。

「誰かね」

「それでは誰がいいでしょうか」

「今探しているよ」

彼女についてもそうしているというのだ。ルターはあくまで公平だ。こつした辺りは流石と言えた。高潔な人物であるのは間違いないのだ。

だが、だ。それでもだった。

彼はだ。やはり難しい顔で言うのだった。

「誰が見つかればいいんだが」

「貴族や騎士の方に会ってもらっているんですね」

「そうしてもらってるよ。けれど」

「けれどですか」

「相手がね」

頂垂れてだ。若い僧侶に話す彼だった。

「うんと言ってくれなくて」

「そうですか」

「そう、どうしてもね」

そうした意味でだ。相手が見つからないのだった。

「どうしたものかな」

「困ったことですね」

「これまで幾つか話をまとめてきたけれど」

尼僧達が修道院を出た後のだ。結婚の話に他ならない。

「やっぱり中々決まらない人はいるよ」

「どうしてもですね」

「けれどいつも決めてきたんだ」

そうしてきたと。ルターは若い僧侶に話す。普段は厳しい顔が今は心配する顔になっている。その顔になりながら話したのだった。

「だからあの娘についてもね」

「決められますね」

「絶対にね」

ルターは諦めていなかった。こうしてだった。

尼僧達の結婚の相手を見つけていく。その尼僧についてもだ。

何とか相手を見つけようとする。しかしだった。

彼女だけは見つからない。どうしてもだ。この事態にだ。

若い僧侶は困った顔になってだ。ルターに相談した。

「あの、やっぱり」

「見つからないな」

「どなたもいいとは仰いません」

「いい娘なんだがなあ」

ルターもだ。腕を組んで困り果てた顔になっている。

「とても心根のいい娘で」

「ですね。それは本当に」

「男は顔じゃない」

まずはここから言う彼だった。そしてさらにだった。

女性についてもだ。こう言うのだった。

「そして女も顔じゃないんだ」

「どちらにしても人間は顔じゃないですね」

「顔で全てが決まれば人間苦労はしない」

ルターは人生的な言葉も述べた。

第三章

「そういうものだよ」

「けれどあの娘は」

「うん、誰もいいとは言ってくれないね」

「どうしましょうか」

「まだ探そう」

ルターはこう言ったのだった。

「誰かいないかね」

「そうですね。それじゃあ」

「誰かいる筈なんだ」98

ルターは何としてもという口調であり意地になってさえた。

「神は生涯の伴侶を決められているから」

「そうですね。ですから」

「絶対にいるんだ」

また言うルターだった。

「だから」

「はい。見つけましょう」

こうしてだった。まだだった。

彼等は彼女の相手を探した。そうし続けた。だが。

結局だ。相手はだった。

「見つかりませんね」

「そうだな」

ルターもだ。流石にだ。

困った顔でいてだ。そうして言うのだった。

「一人もな」

「お見合いをしてもですからね」

「誰もよしと言ってくれない」

「性格は凄くいい娘なのに」

「世の中人を見る目のない男が多い」

よく言われることをだ。ルターも言った。

「実にな」

「そうですね。本当に」

「しかしだ」

それでもだ。ルターは言いだ。

そうしてだ。遂にだった。

彼は決断した。そうして言うことは。

「まだ手はある」

「ありますか？」

「結婚しよう」

腕を組み意を決した顔での言葉だった。

「こうなれば」

「結婚しようとは？」

「だからだ。私いだ」

「？」

その言葉の意味がわからずだ。若い僧侶は。怪訝な顔になり首を捻りだ。そのうえで。ルターに対してだ。こつも言ったのだった。

「誰がですか？」

「誰が」

「はい、結婚しようとは」

「決まっている。それはだ」

「まさかと思いますが」

その怪訝な顔でだ。若い僧侶はまたルターに尋ねた。

「その結婚する人って」

「結婚は男女それぞれ一人でするものだぞ」

「それは常識ですよ。つまりは」

あえてだ。若い僧侶は答えを延ばしてだ。こつ言ったのだった。

「あの娘ですよ」

「それだと正解は半分だな」

「後の半分は」

そのどうしても言えない答えをだ。若い僧侶は遂に言った。
恐る恐るだ。言う答えは。

「今私の目の前にいる」

「そう、そしてそれは」

「嘘ですよね」

「私は嘘は言わない」

頑固で厳格なルターは己にも厳しい。その言葉に二言はない。ただトマス＝ミュンツァーの起こした戦争は最初は支持していたが過激になり過ぎたので後には反対に回った。このことでは嘘吐きと呼ばれ批判されている。

しかしだ。とにかく嘘を言うつもりはない彼だった。それでだ。

今もだ。強い声で言っただった。

第四章

「私が彼女と結婚しよう」

「あの、先生」

若い僧侶は遂にだ。怪訝な顔を啞然とさせてだ。そしてだ。

そのうえでだ。彼に返した。

「聖職者は結婚できませんが」

「そうだな」

「はい、確かに子供はいたりしますが」

公にはならない子供がいたりする。ローマ教皇でもだ。弟の子として自分の子供達がいた。チェーザレ・ボルジアの父アレクサンドル六世だ。

そうした腐敗もルターは嫌っていた。しかしだ。

ルターはだ。それをあえてするというのだ。それに対してだ。

ルターの信奉者である若い僧侶もだ。驚かざるを得なかった。それだ。

その驚いた顔でだ。ルターに言った。

「幾ら何でも公に結婚するのは」

「いいのだ」

「何故いいのですか？」

「私は最早カトリックの者ではない」

ルターが言う根拠はここにあった。

「神父でも司教でもないのだ」

「だからですか」

「いいのですか」

「そうだ。いいのだ」

こう答えたのだった。

「むしろバチカンのそうした偽善をだ」

「否定されてですか」

「私は結婚する。あの娘とな」

「そうされますか」

「バチカンの戒律はもう通用しないのだからな」

それでだというのだった。そしてだ。

ルターはだ。その残った娘と結婚したのだった。その後だ。

彼はだ。若い僧侶にしきりにこんな話をするのだった。

「いや、いいものだ」

「結婚されてですか」

「子供ができるとな。違う」

何とだ。彼は何人も子供ができたのだ。その子供達の話をも。

彼は若い僧侶にだ。満面の笑顔である。

「いいぞ、だから君もだ」

「結婚ですか」

「そうだ、子供達に囲まれること」

そのことこそがだと。ルターの満面の笑みでの話は続く。

「それが神の御教えなのだ」

「はあ。それにしても」

「何だ？それにしても」

「先生つて子供好きだったんですね」

そのことをだ。若い僧侶は知ることになった。

「世話焼きなだけじゃなくて」

「私は前から子供好きだが」

「そんな風には思いませんでした」

実は今までだ。ルターはだ。

厳格で強硬な人物だと思っていたのだ。だからバチカンにも帝国にも逆らったのだ。

しかしだ。今若い僧侶の目の前にいるルターはというと。

優しき夫であり善き父だ。その彼がいるのだ。

その彼を見てだ。若い僧侶は複雑な面持ちで言った。

「まあそれでも」

「それでも。何かね」

「私は先生を敬愛します」

それは変わらないというのだ。

「これまで通り」

「そうしてくれるのか？」

「はい、そうした先生もです」

優しい夫である善き父であるルターもだというのだ。

「また敬愛できるものですから」

「そうか。私の何を敬愛してくれるのかはわからないが」

それについてはだ。ルターは気付かなかった。そうした子煩悩であることが彼にとっては当然であるからだ。当然愛妻家であること
もだ。

だがそれでもだ。彼はだ。若い僧侶がそう言うのならだった。

「ここぞだ。若い僧侶に言った。」

「では君もだ」

「私も!？」

「結婚し給え。いい相手を紹介するぞ」

「考えさせて下さい」

若い僧侶は複雑な顔になってこう返すしかできなかった。だがルターはその彼に対してだ。幸せの中にある笑顔でだ。結婚を勧め続けていた。

ルターの結婚 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0274z/>

ルターの結婚

2011年12月1日01時53分発行